

IV 資料紹介

今城塚古墳の戦国時代城郭

橋 本 久 和

郡家新町に所在する史跡今城塚古墳（指定面積80,569m²）は、年次計画をたてて公有化を進めている。平成6年度末で公有化率は80%に達し、公有化にあわせて雑草などの伐採作業を実施している。古墳名にもなっているように、『大阪府全誌』などではこの古墳は戦国時代に芥川山城の支城として、16世紀中頃から後半の天文または永禄年間に三好長慶また松永久秀が築いたとされている。このため、伐採後、現地を踏査したところ墳丘斜面の崩れが各所にみられ、城郭として再利用されたことをしめしている。地表面の観察にとどまるが、戦国時代城郭の概要を報告する。なお、図2の遺構図は中井均氏の作成したもののもとにした。

主郭は平坦となっている後円部にあり、前方部との境の南側にある土壘状の土手が虎口、その北側の高まりがやぐら台とみられる。後円部斜面の東北と東南には狭い平坦部があり、武者だまりであろう。土壘や空堀は墳丘各所にみられ、とくに北側に顕著である。南側では切岸がみられるものの裾部にはとくに遺構はみられない。くびれ部東の平坦部が正面の虎口とみられ、周囲には「コ」の字状の土壘や塹壕状の堀が目立つ。前方部の稜線は幅1mほどの土壘となり、前方部の頂部から後円部の主郭へつづいている。西北部の稜線は中間で「L」字状に屈曲し、横矢掛けとしている。また、主郭の手前で南側に突き出した竪土壘がみられ、前方部西側の裾部には幅数mの堀がみられる。このように、北側を正面に築城したものとみられ、二重の濠は防御に最大限利用されたものとみられる。

現状では今城塚古墳の戦国時代城郭がいつ築かれたか詳しく知ることはできないが、合戦時に使用される軍事的な臨時の「陣城」とされるものであろう。また、西国街道に面し交通の要衝を押さえ、北方の三好山にある芥川山城を強く意識しているため、三好・松永

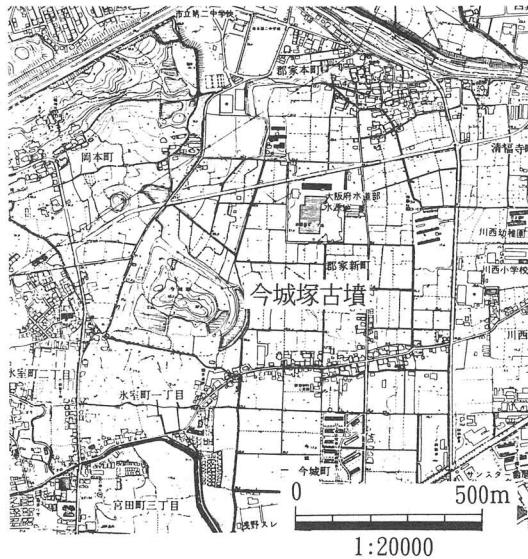


図1 今城塚古墳の位置

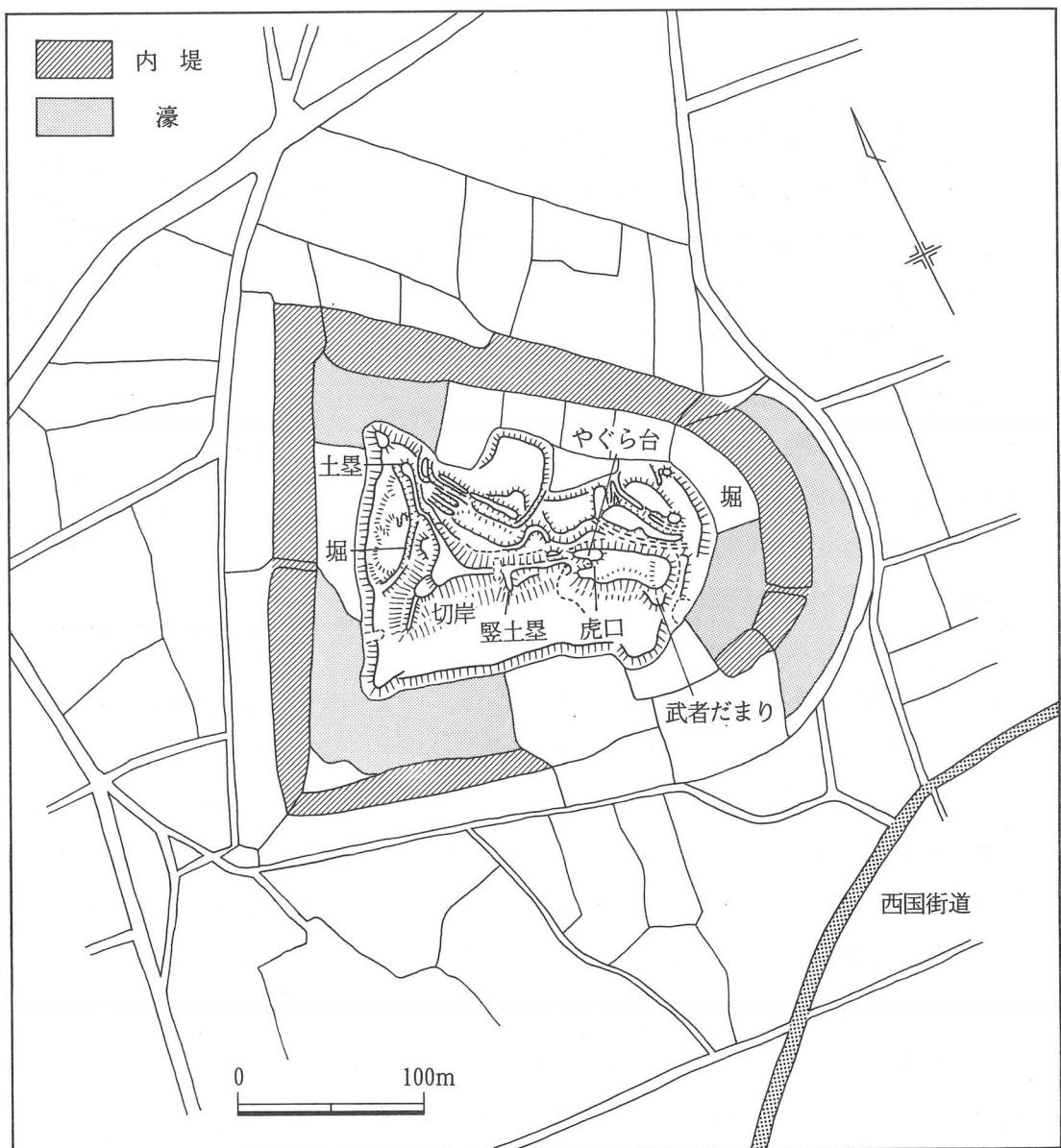


図2 今城塚古墳の戦国時代城郭遺構図

以外の戦国武将を考慮することも必要になろう。

府下には古墳を利用した戦国時代城郭として、誉田城（応神天皇陵）や高屋城（安閑天皇陵）などがある。なかでも今城塚古墳は遺構が良好に残り戦国時代城郭研究にとって重要である。